

ようこそ坂柳有栖のD  
クラスへ

いろはす@

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

生まれながらの天才少女、坂柳有栖。もしも彼女が、万全な状態であるの学校に入学していたら・・・え？このわたくしがDクラス？ふふふ・・・ご冗談を。

※pixivとのマルチ投稿作品です。

# 目次

最終話：そして始まりの終わり |

第1話：10年目のはじめまして

1

第2話：ハイキックでこんにちは

24

第3話：初めての学級会

37

第4話：初めてのお散歩

53

第5話：ドラゴンボーイと愉快的会長さ

ん | 72

第6話：ようこそ独身上主義の職員室

へ | 104

第7話：スクール水着でごきげんよう

135



# 第1話：10年目のはじめまして

— あなたの判断で行動すればいい。未来における自分の責任は、現在の自分が負うべき。それがあなたとDクラスの未来

BY 長門有希『涼宮ハルヒの憂鬱』

「知ってる天井です・・・」

ゆつくり目を開けると、そこは一面に広がる真っ白な世界。見慣れた病室の壁に、一瞬あのお部屋を思い出してしまいました・・・

「目が覚めたんだね、有栖」

頭だけ動かしてそちらを見れば・・・

「お父、様・・・」

「本当によく頑張ったね。そして、おめでとう」

その言葉で、ようやく全てを理解しました。そう、私は今日ついに、先天性疾患を克服したのです。これでやっと、スタートラインに立てました。待っていて下さいね、あやのk・・・

「気分はどう？有栖ちゃん」

不意にかけられた声に、私の思考は中断を余儀なくされました。お父様の後ろから顔を覗かせた、綺麗な女の人。女優の米倉涼子さん似の、すらりとした美人さんです。私の主治医にして、命の恩人。ちなみに彼女をはじめ、私を治療して下さったメディカルチームの皆さんは全員、お父様が理事長を務める高度育成高等学校の出身者です。

「はい。とても快適です、先生」

「そう、良かったわ」

「これならいまずぐにでも、彼のところへ会いに行けそうです。」

「何とお礼を申し上げればいいのか……お陰様で娘は……」

涙ぐむお父様に、先生は真顔で応じました。

「私、失敗しないので」

入院中、何度も聞いたセリフに頬が緩んだところで、大事なことを思い出しました。

「えっと……お父様。あの件についてなのですが……」

おずおず切り出すと、

「ああ、なんでも言いなさい。そういう約束だったからね」

その約束とは『私の疾患が完治した暁には、お父様がひとつだけ、私のお願いを叶えて下さる』というものでした。

「はい、有り難うございます。では、あと5年ほどしたらお話しますね」

「ん？どういうことだい？有栖」

「ふふふっ・・・その時まで秘密です」

首を傾げるお父様に、私はそっと微笑み返すのでした。





「それで坂柳先生、お話とは？」

「もう先生はやめて下さい。いまの私にとっては、娘を救ってくれた君こそが先生ドクターです」

苦笑いと共に答えるのは、坂柳理事長。その目の前に佇む若き天才女性外科医にとって、彼は高校時代の担任教師であつた。

「さて、この喜ばしい日に、少し世間話でもしましょうか・・・」

その割にはどこか浮かない顔で、坂柳理事長は切り出した。

「君が卒業してから何年になるでしょう・・・いま、あの学校はおかしな方向に進んでいます。言葉遊びで新入生を騙したり、過去問の丸暗記で定期試験をクリアさせたりと、

公に出来ない所業を繰り返しているのです。創設当時の理想はとつくに潰え、いまや互いに蹴落とし、足を引っ張り合い、いかに退学しないで済むかに悪知恵を絞るだけの有様です。当初は本校の特色だった特別試験も、最近では生徒たちの裏をかくような設定のものばかりになりました」

一度言葉を切り、ため息をつく現理事長。対する教え子は、両手を白衣のポケットに入れ、黙って立ち尽くすばかりだ。

「来年度からは、新たに国有地の無人島を舞台にしたサバイバル試験が始まる予定なのですが、都会育ちの生徒たちには危険すぎる内容と言わざるを得ません。さらに今年からは、入学時に配布されるプライベートポイントの額も、ひとり10万円に引き上げられました」

静かに耳を傾ける彼女は、当然の感想を口にした。

「非常識なまでの大判振る舞いですね。私の頃とは桁違い・・・いきなり新入生に渡す金額ではない、と思います」

「ええ、そのとおりです。しかもそれに伴い、ポイント支給額も毎月変動することが決まりました。場合によってはゼロポイントもあり得るほどに・・・」

「えっ?!まさか・・・それだと日常生活にも支障が出てしまうのではありませんか?坂柳先生」

驚いて聞き返す彼女の言葉遣いは、いつの間にか高校生だった頃のものに戻っている。

「それについては、賞味期限切れ間近の食材を無料で配布し、救済措置とそうす。フードロス対策にもなる、というのが文科省の建前だそうですね」

「・・・先生・・・いえ、理事長は、その措置に反対なさらなかったのですか?」

卒業生のひとりとして、彼女の口調が暗に咎めるようなものになるのは仕方あるまい・・・

「もちろん意見書は出しましたが、結局上からの指示には逆らえないのですよ。もはや、君たちが在学していた頃とは、何もかも変わってしまったのです。これでは君のような逸材など、育つはずもありません」

自嘲気味に話す恩師の姿に、今度は教え子の方がため息をついた。

「はあ・・・私、フリーランスで良かった・・・それで、先生はどうなさるおつもりなのでしょう?」

その問いには答えず、彼は別の言葉を口にした。

「実は最近、娘があんの学校に行きたがるようになりましてね」

「有栖ちゃんが・・・ま、まさか?!」

「ええ、たぶん君の予想通りです。先ほどのお願い、というのも、おそらくは。しか

し・・・」

坂柳理事長は、話題の深刻さに反して、嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「この短い会話だけで分かってしまうとは、さすが元Aクラスリーダーにして、生徒会長を務めただけのことありますね」

教え子の慧眼に思わず目を細めると、再び表情を改めて話を続ける理事長。

「おそらく有栖が受験する頃には、もつと酷いことになっているでしょう。情けない話ですが、私の力ではどうしようもありません。ですが、全力を出せるようになった有栖ならば、或いは・・・」

「真の実力至上主義、というわけですか・・・」

「そう言うことです。無論、有栖自身が入学試験を突破できることが大前提ですがね。ところで、ここからが今日の本題なのですが、やはり本校の教師になるつもりはあり

ま・・・」

「いたしません」

ぴしやりとはねつけられ、ふたりの会話は終わるのであった。そして・・・

「最後にひとつだけお聞きしても宜しいですか？坂柳さん」

元生徒から医師の顔に戻ると、彼女は問いかけた。

「あなたは・・・わざと仕向けましたね？有栖さんが高育へ興味を持つように」

言い逃れは許さない、とばかりに大きな瞳を更に見開く一匹狼の女性ドクター。その視線に耐えかねたのか、坂柳理事長は肩をすくめて応じた。

「その質問には、父親と理事長、どちらの立場で答えるべきでしょうか？」

「あなたという方は・・・」

絶句する、かつての教え子。

「私に幻滅しましたか？」

「・・・」

そして、かつての恩師は静かに言うのであった。

「あの子には力があります。そして、それを使わないのは愚か者のすることです」

坂柳有栖、10歳の秋のことであつた。

数年後・・・

ようやくこの日が来ました。待ちに待った瞬間です。

あれからの数年間、私はひたすら心身の鍛錬と学力の充実に努めました。おかげで柔道、合気道、截拳道などは免許皆伝、学業でも高校の履修内容はほぼ習得済みです。我ながら、生まれながらの天才は半端ないですね。ふふふ・・・尤も、まだまだこの程度では、彼には追い付けませんが。

本当は、あのお部屋に途中入会したかったのですが、お父様に全力で止められてしま



いました。解せません。

さて、真新しい臙脂色の制服に身を包んだ私は、入学式へと向かうバスに乗り込みました。車内はすでに、同じような新入生で混み合っていますが・・・

私はすぐに、迷うことなく見つけました・・・何を？ですって？ふふふ・・・もう逃がしませんよ。

予想通り、後ろの方の座席で窓の外を眺めている男子生徒がひとり。おそらく一般の方々の目には、少し気だるげで無表情な茶髪イケメンに映ることでしょう。でも、その実力は・・・少なくとも、生徒の中でそれを知っているのは私だけのはずです。

「お隣、宜しいでしょうか」

ですが、期待と不安を抱えつつ、何度も練習したひとことを口にしようとしたその時、

「はっ！」

思わず低い声が漏れてしまいました。なぜなら、高育の制服を着た見知らぬ黒髪ロングさんが、彼の隣に座っていたからです。朝から泥棒猫とは大した勇氣ですね。ましてや、私と彼の再会劇を邪魔立てするとは・・・

「ごめんください。坂柳有栖と申します。そこはわたくしの席なのですが」

彼の手前、最低限の礼節を保って話かけました。しかし・・・

「いきなり失礼ね。私が座っているのが見えないのかしら」

手元の文庫本に目を落としたまま、不愉快そうに答える黒髪。（呼び捨て）

ほぼ無視ですか。ふふふっ・・・おめでとうございます。栄えある『嫌いな人リスト  
高校Ver.』登録第1号ですよ、貴女。

「ご冗談を。そこは10年前からわたくしがキープしていた座席です」

どんなウソも、一度言葉にしてしまえば真実となります。それが許されるウソならば。(持論)

「は？貴女大丈夫かしら？あいにく私も冗談は嫌いなもの。そんなに座りたければ、他の席に行けば良いでしょう？」

きつい表情で睨んでくる黒髪美少女。わかりました。そちらがそのつもりなら、こちらも出し惜しみは致しません。では、いざ……

しかし、私の口撃隊は思わぬ横槍に遮られてしまいました。

「あの、私からもお願い。彼女、あまり丈夫そうには見えないから席を譲って貰えないかな？社会貢献にもなると思うし」

文字通り、小さな親切大きなおっぱ……ケホケホ！

口を挟んできたのは、やはり私と同じ制服を着た、天使のような美少女でした。同性の私ですら見惚れてしまう、大変立派なものをお持ちです。あれ？なぜでしょう。急に腹が立ってきました。

「ふぎけないで。社会貢献なんかに興味はないわ。それにそちの貴女、確かに小柄ではあるけれど、そんなに弱くはないでしょ？それどころか、何か武道をやっているわね？好戦的な空気が滲み出ているわよ」

なにやら確信めいた視線を向けてくる黒髪。ほう・・・どうやら、単なるツンデレではないようです。

「え？そ、そうなの？」

驚いたように尋ねてくる天使さん。ていうか、満員のバス内でその質問にどう答えろと？

「ふふふふふふ」

と、不意に響く高笑い。周りのお客さんたちも、かなりドン引きしています。いまの声、まさか貴女たちじやありませんよね？

「黒髪ロングツンデレガールにつるぺたロリガール、そしてポインガールか。朝からこんな素晴らしい3Pを見られるとは、今日の私は運がいいようだ」

見れば、時代錯誤のセクハラ発言を放ったのは、優先席に陣取る金髪男子のようです。その蛮勇に免じて、あとで派手に屠ってあげるとしましょう。

「オレが立つから座ってくれ」

すると・・・なんとということでしょう！彼が席を・・・レディーファーストを体现するその振る舞い、さすがです・・・はっ!? いやいやいや、あり得ません。じゃあ、ツンデレ黒髪さんと仲良く隣同士でござ席? ござ冗談を。それではこの席に拘る意味が無くなってしまうです。

「そ、それはダメです！」

理論が破綻しているのは承知の上で、敢えて待ったをかけます。

「なぜかしら？ 貴女、ここに座りたいのではなくて？」

そう言いながら、黒髪ロングまで席を立つてしまいました。このままだと私は、他人から席を奪った単なるわがまま少女です。

「いえ、わたくしは綾小路君の隣がいいのです」

「え？」

固まる御三方。あ、やってしまいました。(汗) つい、彼の名前を……これは面倒なことになりそうです。

ところが。

「そう・・・あなた達、知り合いだったのね」

「あはは・・・なんか余計なおせっかいしちゃったね。ごめんなさい」

勝手に自己完結した黒髪とエセ天使は捨て置き、私はやつとお目当ての席に座ることができました。横には当然、僅かな困惑の色を見せる彼が・・・隣に座るだけなのに、どうしてこんなに時間がかかるのでしょうか？とにかく、さっきの3人とはこれ以上関わりたくないものです。まあ、4つもクラスがあるそうですから、心配ないでしょう。(フラグ)

では、いざ感動の再会と行きましようか。

「改めまして、坂柳有栖と申します。お久しぶりですね、綾小路君」

正確には10年プラス5日と14時間ぶり、でしょうか。

「済まないが、人違いじゃないのか？」

表面上は至って平静に問いかけてくる、綾小路君。ここは手数をかけずに行きましよう。

「ホワイトルーム」ボソツ

そのひとことで、彼の警戒レベルが瞬時に跳ね上がるのを感じました。私の身体を射抜く、凄まじい威圧感。殺気と言いつてもよいほどのプレッシャーに、思わずゾクゾクしてしまいました。最近覚えた夜の日課などとは比べ物にならない、甘く痺れるような快感です。（暴露）

全身から危険な負のオーラを放つ、ホワイトルームの最高傑作。事情を知る身としては些か複雑な心境ですが、出来れば彼には後顧の憂いなく、高校生活を楽しんで頂きたいのです。そうすればきつと、あのお部屋では学べなかつた『感情』というものを、知ることが出来るはず。そしてそんな彼の青春の1ページに、もし宜しければ私も・・・



つと、これはさすがに、口にするのは恥ずかしいですね。

「わたくしはあなたの敵ではありません。むしろ、お友達になりたいと思っ  
ているので  
す」

「友、達……？」

彼からのプレッシャーが消えました。どうやら『当たり前』だったようです。

「はい。それにお忘れになっているのも当然です。お会いしてから、すでに10年経っ  
ていますから」

「そうか……」

再び人畜無害なイケメンに戻った彼は、なにやら思考を巡らせているようでした。こ  
こは一気に畳み掛けるべきでしょう。

「わたくしは見学のためにあの施設を訪れ、幼い日のあなたとお会いしているのです。同年代の女の子と、チェスをした覚えはありませんか」

期待をこめて問いかけてましたが・・・

「・・・記憶にない。ルーティンをこなすだけの日々だったからな」

・・・それでも良いのです。私の心の中には、いまでもあの日の思い出がはつきりと刻まれているのですから。はい？ 試合結果ですか？ むろん私の完敗でしたが何か？

「なあ、ひとつ聞いてもいいか？」

するとまさかの言葉が。あの最高傑作が私に聞きたいこととは、一体・・・

「どうぞなんなりと。趣味特技、好きな食べもの、男性のタイプ、今日の下着の色にスリーサイズ等々、なんでもお答え致します」

「いや、そういうのは必要ないんだが・・・」

そこはウソでも動揺して下さい。

「ふふふ・・・笑えない冗談ですね。では用件を」

相変わらず無表情のまま、彼は言いました。

「なんでお前だけ、ベレー帽を被ってるんだ？」

訂正です。やはりそういうところは不良品ですよ、清隆君・・・

## 第2話：ハイキックでこんにちは

— 春。それは新たな面倒事の始まり —

BY 小鳥遊六花 『中二病でも恋したい』

「入学式は1時間後に始まる。遅れるなよ」

それだけ言い残すと、担任の茶柱先生は出て行きました。たつたいま受けた、この学校に関する様々な説明。お父様からお聞きしていたものとは、かなり違います。例えるなら、Amazonの商品写真みたいなものでしょうか。（直球）あまりにおかしなところだらけでしたので、その場での質問は差し控えました。現在、頭の中で今後の行動を

素早くシミュレート中です．．．

ふむ、結論が出ました。どうやら少し忙しくなりそうですね。先ずはクラスを掌握しなければなりません。では、行動開始．．．

はい？ええ、そうですね。路線バスの中からクラス分けまで、ごっそり内容をスキップさせて頂きました。だって、どうせ皆さんご存知の展開ばかりでしょうから。（手抜き）

ひとつだけ申し上げておきますと、私がお父様に5年越しでお願いしたのは『高度育成高等学校に綾小路君と同じクラスで入学したい』ということでした。

元々は、お父様から伺った学校の内容に興味を持ったのが志望動機でしたが、綾小路君がホワイトルームを脱走してあの学校に入ると聞き及び、お願いの内容が増えたというわけです。あ、でももちろん、ちゃんと入試は受けましたからね！

コホン！さてと、本編に戻りましょう。

「皆さん、少しお時間を頂いても宜しいでしょうか」

茶柱先生の姿が廊下へ消えたのを確認すると、私は優雅な動作で立ち上がり、周りの機先を制しました。こうした動きやタイミングの図り方は、一朝一夕で身に付くものではありません。小中学校での生徒会活動を通じて培った、いわゆる経験値がものを言う

分野です。

それゆえこうした場面では、残念ながらあのお部屋しか知らない綾小路君には、あまり期待できません。まあそのぶん、彼にはそれ以外のところで活躍して頂く予定ですが……

「わたくしたちはこれから3年間、同じクラスで共に過ごすことになります。ですからいまのうちに、お互い自己紹介しておきませんか？」

「うん、そうだね。僕もそう思うよ」

私の提案を受けて真つ先に反応したのは、いかにも善人風な爽やかイケメン、平田洋介君。このクラスの男子は、彼が纏めてゆくことになりそうですね。

「賛成〜！」

「あたしたち、まだお互い名前も知らないし」

軽井沢恵さんや佐藤麻耶さん、篠原さつきさんなども賛同の声を上げました。ていうか、まだ名前も知らないとは、皆さんさつきからどこを見ていらつしやるのでしょうか？そこにネームプレートが有るじやろ？

「では、わたくしからやらせて頂きますね。はじめまして。坂柳有栖と申します。かの征夷大將軍、坂上田村麻呂の『坂』に、柳の下に二匹目のドジョウはいないの『柳』と書いて坂柳です。勉強、運動ともある程度はこなせます。あと、実は父親が本校の理事長を務めているのですが、裏口入学ではありませんのでどうぞ宜しく願いますね」

後々、面倒事の原因になりそうな要素は真っ先に排除しておくべき。お父様の件は、予めバラしておいた方が得策です。

「ははは・・・こちらこそ宜しく、坂柳さん。ユニークな自己紹介を有り難う。これでみんなも、緊張しないで話せるね」

平田君の完璧なフォローで、周囲の反応も上々です。私は別に、受けを狙ったわけで



はないのですが。ふふふ……彼は、オモテの任務ならば使えそうです。

「わあくお父さんが理事長かあく凄いね！」

バスでの一件で良い人を演じていたエセ天使、櫛田桔梗さんが明るい声を上げました。あ、言い忘れておりましたが、彼女を含めた例の3人は、あろうことか全員このDクラス。理解不能、意味不明です。

さて、あれだけの容姿にフレンドリーな性格。櫛田さんはご本人の狙い通り、クラスヒロイン枠確定でしょう。ですが残念でしたね。私の目は節穴ではありません。あまりにも完璧すぎるキャラ作りは、却って他人に不信感を抱かせます。その猿芝居ならぬ人芝居、私には通用致しませんよ。なんならこの場でその仮面、剥がして差し上げましょうか？

……いけません。思考が良からぬ方向に逸れてしまいました。こちらはまだ、キャラ作りの最中でしたね。テヘペロ。

「こちらこそ、有り難うございます。ところで、皆さんの自己紹介が終わったあと、改めてお時間を頂きたいのですが・・・」

本題はこれなのです。

「もちろん構わないけれど・・・大事な話なのかい？」

「ええ、とても。おそらくは、このクラスの命運を左右するかと」

これだけ思わせぶりに話しておけば、仕込みは大丈夫でしょう。

・・・と思った私が浅はかでした。

「ふはははははははつ！大事な話とやらがあるなら、いますぐ聞かせて貰いたいものだねえ、リトルガール。それがムリなら、これで失礼させて頂こう。あいにく私はこのあと、予定がぎつしり詰まっているのだよ」

そう言いながら、教室を出ようとする高円寺六助君。はあ・・バスでの言動から、ひと筋縄ではいかない変人さんだとは思っていましたが・・まだ入学式も始まっていないというのに、お花摘み・・ゲホゲホ！男子は雉撃ちでしたね・・お手洗い以外に何の予定があるというのでしょうか。

やはりこのままでは、彼はクラス運営における不安要素になりそうです・・仕方ありません。ここで沈めて手駒にしましょう。

「どうやら話は無いようだね。では諸君、アディオス」

「お待ち下さい」

呼び止める私の声が、僅かに低くなったことに気付いた方はいらしたでしょうか。

「なにかな？ 未来の日本を背負って立つ予定の私は、女性諸君から引く手あまたでね。リトルガールのままごとに付き合っている暇は無いのだ・・・よおっ?!」

私は得意のハイキックを、振り向いた彼の顔から数ミリの位置で寸止めしました。身長差があるのでかなり無理な体勢になってはいますが、安心して下さい。スカートはしっかりと捌いていますから。

「あなたもクラスの一員である以上、お話は聞いて頂きます。あとわたくしは、幼女ではありません」

右足を大きく振り上げたままで、私は彼に殺気を飛ばしました。あんまり締まらない格好ですが。

「ほう・・・なかやかやるねえ。これで下着が色気のないくまさんパンツじゃなければ最

高d・・・ひでぶっ?!」

「「「なっ?!」」」

私に蹴り飛ばされ、教室の後ろにあるロッカーへめり込む高円寺君と、若干1名を除いて息を飲むクラスメートたち。ふふ、やはりこれくらいでは、彼を驚かせるのは無理なようです・・・

「あら、ごめんあそばせ。足元が狂ってしまいました。ふふふ・・・」

礼儀知らずのナルシスト相手に、つい淑女の嗜みを忘れて本気になってしまいました。さて、監視カメラにはばっちり録られてしまったでしょうし、事後処理はどう致しましょうか。いちばん効果的なのは、取り敢えず泣きまね作戦ですが、ハイキックのあとでは些か説得力に欠けますし・・・

「ぼ、暴力はいけないよ、坂柳さん!それに高円寺君も言葉を慎むべきだ!」

狼狽えながらも声を上げる平田君。彼は、すでにしつかりクラスメートの名前を把握しているみたいです。

「そうよ！なにアイツ、デリカシー無さすぎじゃない？」

「へ、変態だわっ！」

「キモい……」

ふう……どうやら泣きまねの必要は無さそうですね。女子を味方につければ、もはや勝ったも同然です。(経験則)

「てか、坂柳さん、すご〜い！」

「なにか習ってるの?!」

「ツヨカワクイーン?!」

「銀髪妹系ファイター！あとは露出度の高いコスチュームさえあれば、完璧でござるっ！！」

あらら？なんだかおかしな方に評価が傾いているようです。私が目指すのは総合格闘家ではなくて、クールにクラスを操る影の参謀ポジションなのですが。（初動で失敗）それといきなりで恐縮ですけど『強カワクイーン』って書くと、強力な女王様って誤読してしまいました。（唐突）

かなり手加減したせいか、高円寺君は直ぐに起き上がって来ました。取り敢えず、その筋肉は伊達ではないようです。金髪頭には、でっかいホコリが付いていましたが。（笑www）

「ふ・・・ふは、ふはははははっ！実に素晴らしいハイキックだったよ。いいだろう、君を私の友人と認めようじゃないか、つるべたロリg・・・あべしっ!？」

ふう・・・わたくしとしたことが、またつまらぬものを蹴ってしまいました・・・

「ふふふ・・・このお話が、日間ランキング（加点・透明）21位、ルーキー日間（加点）29位になったそうですね」

「ふははははっ！その程度のことでは狼狽えるとは、実にみつももないねえ、リトルガール」



### 第3話：初めての学級会

— 能力のある人間の無自覚は、能力のない人間にとっては単なる当て付けだ —

B Y 折木奉太郎『氷菓』

さて、失礼極まりない金髪ボーイをぶっ飛ばし、これにて一件落着・・・とは行かなかったようです。

「必要性を感じないわ。失礼しても良いかしら？」

「けっ！俺らはガキかよ？自己紹介なんてやってられるか！」

私の振る舞いにドン引きしつつも、捨てゼリフを残して立ち去ろうとする黒髪さんに赤髪君。はあ・・・面倒ですが、何としても引き留めなければなりません。ここは実力至上主義の学校。先々、安全で快適な高校生活を送るためには、初めに全員が情報と心構えを共有しておく必要があるのです。

「お待ち下さい、堀北鈴音さんに須藤健君」

「は？」

「あ？」

絶妙なコンビネーションを見せて立ち止まる、不良品のおふたりさま。意外と相性が良いのかも知れませんが、お高くとまつてるツンデレさんに脳筋おバカさんだけど愛さえあれば関係ないよねっ。おにあい。

こんな深夜アニメ、あまり見たくありません・・・

「どうして貴女が私の名前を知っているのかしら？非常に不愉快なのだけれど？」

あくまでも非友好的な態度を変えない堀北さん。バスでの遣り取りで、取り敢えずお近づきになったつもりでしたが、どうやらわたくしの早とちりだったようです。

あ、貴女のお名前についてでしたね。そんなの、さつきもちらりと触れましたが、机にネームプレートが貼ってあるからに決まっていますじゃないですか。ええ、そうです。さつきから私がクラスメートたちをフルネームで認識していたのは、これを見ていたからですよ。二次小説では、この点に言及しているケースは少ないようですが。あれ？ということはそもそも、自己紹介って必要だったのでしょうか？（白目）

「・・・話すつもりが無いなら、もういいわ」

ひとりで話を纏め、そのまま出て行く素振りを見せる堀北さん。ここは敢えて、彼女を説得することにはしましょう。本来なら、こんなまどろっこしい方法は取らないのです

が・・・彼女は潜在能力がかなり高そうですので、懐柔して成長を促すやり方に方針転換です。（上から目線）

「貴女はこれからずっと、おひとりで過ごしてゆくおつもりなのでしょうか？」

私の問いかけに、彼女は振り向きながら答えます。

「ええ、その通りよ。私の能力なら単独の方が動きやすいわ。無能な他人はむしろ、足手まといになるだけだから」

「おやおや、なんとも自信過剰なお嬢さんです。完全に孤独と孤高を履き違えているようですね。」

「では、もしクラス単位で競う試験があったらどうします？」

「え？そ、その時は・・・」

やはり何も考えていなかったのか、堀北さんの返事は要領を得ないものでした。やれやれ、手間のかかるツンデレさんです。

「おひとりさまを貫き通すのはご自由ですが、その結果、堀北さんがこのクラスにとって足手まといになったとしたら、貴女は無能者だったという結論になりますか？」

「くっ……わかったわ、貴女の話の聞けば良いのでしょうか？ただし、自己紹介はしないわよ？」

さて、残るはあとひとり……

「あん？俺は残らないぜ。早くバスケの練習がしたいからな。だいたい、どうしてお前みたいなちびの言うことを聞かないやならねえんだよ？」

ちび……？気が変わりました。彼はここで切り捨てましょう。

「ふふふ……ところで須藤君、あなたは『ジパング』というアニメをご存知ですか？」

「はあ？俺の知ってるアニメは『スラムダンク』だけだぜ！」

聞いた私が愚かでしたね。ちなみにあのアニメには「戦闘『みらい』」という、素晴らしい処刑用BGMがありました・・・

「西暦20XX年、謎の嵐に巻き込まれた海上自衛隊の最新鋭イージス艦『みらい』は、1942年6月のミッドウエー海戦当日へとタイムスリップしたのでござるよ!!」

私の思考を遮って、なぜか大興奮の外村秀雄君。やはり、ヲタクに恋と空気を読むのは難しいみたいです。

「なにをこちやこちや、わけの分からねえことを言つてやがるんだ？俺は行くぜ？勝手にやつてろ、ちび！」

ちび・・・？二度も言った？お父様にも言われたことはないのに・・・

「ひつどい・・・」

「何よその言い方!」

「なんであんな不良がこの学校にいるわけ?」

おっと? 思わぬ援護射撃です。サルヴオー!

「ちっ! な、なんか文句あるのかよ!」

そんな女子たちからのブーイングにたじろぐ須藤君。おそらく、部活ひとすじだったあなたはご存知ないのでしようけれど、女子グループに嫌われたら学園生活はジ・エンドですよ。(経験者談)

「どうやらあなたは、熱血バスケット少年のようですね。では、もしわたくしのお話を聞いて下さるのなら、あとでバスケの1on1勝負を致しましょう。こてんぱんに叩きのめして差し上げますよ」

「たかが1門の砲で何ができる?!」

どなたか、外村君を黙らせて下さいませんか？

「んだと?!上等だ!じゃあ自己紹介でも何でもやってやらア!その言葉忘れんなよ?!」

敵意剥き出しで吠える須藤君。ふふふ、これでミッションコンプリートです。



ふう・・・やつと、面白くもなんともない自己紹介タイムが終わりました。男子はお調子者の山内春樹君に、思春期真っ盛りの池寛治君や、先ほどから目障りなアニメヲタ



クの外村秀雄君。ガリ勉っぽい幸村輝彦君はお名前をふたつお持ちのようですが、彼も中二病なのでしょうか？そしてまさかの男の娘枠、沖谷京介君・・・え？高円寺君？そんな名前の方、いらっしやいましたっけ？（すつとぼけ）

女子の方は、ほぼ想定内です。全員とお友達になりたい症候群の櫛田さんを筆頭に、攻めは強いが守りが脆い軽井沢さんや、彼女が眼鏡を外したら、を地で行く佐倉愛里さん。実は出来る子、松下千秋さんなど・・・なんか、尖った方が多いですね・・・

さて、これでクラスメートたちのパーソナリティは、概ね把握できました。唯一、綾小路君の自己紹介には期待していたのですが・・・残念です。あと、この雰囲気の中でおも自己紹介を拒否した堀北さんは、使い方を間違えなければ強力なお道具・・・ケホン！武器になるかも知れません。

「みんなありがとう。じゃあ坂柳さん、改めてお願いできるかな？」

平田君のイケメン采配で、再び私のターンが巡って来ました。このDクラスが飛躍できるかどうかは、これからの数分間にかかっています。団体行動が求められる以上、た

とえ不本意ではあっても、他人との連携は不可欠だからです。

「なんだか学級会みたいだね。楽しみだなあ。頑張つて、坂柳さん！」

もはやお決まりとなりつつある、榎田さんの陽キャアピール。相当ストレスかかってませんか、それ。いつか暴発しますよ？

「貴重なお時間を、再度有難うございます。では早速、ヲタク学級会を始めさせて頂きたいと思います。．．皆さん、天井をご覧頂けますか？」

さらっと学級会ネタを頂戴すると、私はバスガイドさんのように右手を翳しました。あ、外村君、そこは反応しなくて結構です。

「なっ?!か、監視カメラ？」

「うそ? あんなにたくさん．．．」

見上げて驚く生徒たち。やはり若干1名を除き、誰も気付いてはいませんでしたか……。いえ、もうひとり、高円寺君のリアクションはわざとですね。食えない方です。

「ええ、見ての通りです。防犯目的にしてはあまりにも多過ぎる監視カメラ。廊下や階段にもありました。この事実と先程の茶柱先生による説明を踏まえれば、来月のポイント支給額は恐らく……」

いったん言葉を切り、クラスの反応を探れば……。ふふふ、みんな良い子で聞いてくれていますね。ちよつとした口調や言葉選び、表情、仕草。他人を惹き付ける話し方というものは、時に学力や腕力をも凌ぐ武器となります。あ、私は全部持っていますか？

「いきなり10万円。おかしいとは思いませんでしたか？」

「ここは敢えて切り口を変えて、相手の注意を引きましよう。」

「え？だって、俺らにはそれだけの価値があるって……。なあ？」

愚かな反論を試みて、周囲に同調を求める池君。彼など最初からお呼びではありませんが、ここは会話を繋ぐために利用させて頂きましょう。

「ええ、確かに先生はそうおっしゃいました。では皆さん、これまで毎月のお小遣いはお幾らでしたか？」

高円寺君を除けば、みな一般家庭の子女のようです。まさか月10万円のお小遣いを貰っていた方など、居るとは思えません。はい？私ですか？甘え声でお父様におねだりすれば、幾らでもOKでしたが何か問題でも？

「・・・そうです。入学したばかりの私たちに、そんなお値段が付くはずがありません。それに値するのは、卓球と野球で全国大会に行かれたという、山内君ぐらいのものでしょうか」

「ぐうっ?!」

当のご本人は、クラス中からジト目の視線を浴びて瀕死状態です。ほらごらんなきい。慣れないウソは危険なブーメランになるだけですよ？

「たぶん、わたくしたちの言動は、学校側に逐一監視されていると思われます。そしておそらくは、それらを数値化してポイントの支給額に反映する仕組みこそが『Sシステム』の根幹ではないかと。だから差し当たり今月中は、各自生活態度に注意しつつ、手持ちのポイントを温存する方向で過ごすべき……と考えました。もちろん、まだ推測の域を出ない仮定の話ですから、皆さんに強要するつもりはございません」

さて、現時点で話せる部分は話しました。クラスメートたちの反応や、いかに？

「え〜洋服やコスメいっぱい買おうと思ってたのに！」

「プレステGETのチャンスがあ……」

「ウマ娘のコスプレ衣装が遠ざかってゆくでござる……」

はあ……若さゆえの過ちでしょうか……あと最後のは聞き違いでしょう、きっと。

「そっか……話してくれて有り難う、坂柳さん。おかげで浮かれた気分が引き締まったよ」

平田君が理解を示して下さいさったおかげで、クラスの空気は肯定的なものになりました。あとは口止めですね。

「いいえ、まだ確証はありませんので。あと、このお話はここだけのオフレコにするべきかと」

「ええ?!なぜだい?むしろ学年全体で共有した方が……」

だからあなたは甘ちゃんなのですよ、平田ボーイ。

「もちろんその通りです。しかし、もし私たちへの評価が個々人だけではなく、クラス単位でも下されるものだったとしたら……」

「!!」

これには、平田君をはじめ、幸村君や堀北さん、松下さん辺りも強く反応しました。あら、このクラスも案外捨てたものじゃないですね。

「わかったよ。みんな、まずは今月いっぱい、坂柳さんの仮説をもとに過ごしてみないか？その後どうするかは、来月の状況を見て柔軟に判断しよう」

「うん！私も賛成だよ！ポイントが必要だしね」

「平田君がそう云うなら・・・」

「まあ、確かにポイントは欲しいしなあ・・・」

上手いですね。頭ごなしの命令ではなく、あくまでも協力を求めるという形で、クラスの見を集約させた好青年平田君。そして絶妙なタイミングでそれに同調した墮天

使、櫛田さん。しかもポイントという、目に見えるメリットを示して。さすひら、さすくし。いまいち語呂が悪いですね。

さてと、警告はしました。あとは彼ら、彼女らがどう判断するかです。それを踏まえた上で力を合わせれば、自ずと結果は付いてくることでしょう。

では、次なるミッションは、いざ他クラスの偵察です・・・

「あれ？さつききの坂柳ちゃんのキックって、校内暴力だからポイントをマイナスされちゃうんじゃない・・・」

しーっ！そこはご都合主義というものですよ、池君。バキッ！（ハイキック一閃）



## 第4話：初めてのお散歩

— 敵を減らし、敵にとっての敵を増やすこと。全ては相対性の問題である。最終的にクラスポイントで相手を上回ることに。特に情報の質と量に注意せよ —

BY ヤン・ウエンリー提督『銀河英雄伝説』

退屈な入学式を終え、教室へ戻って来た私たち。このあとは流れ解散なのですが、皆さんすでに、心は娯楽施設へ飛んでいるようで・・・

「ゲーセン行こうぜ！」

「ラノベが拙者を呼んでいるでござる！」

「うそ？もう夏物出てるよ！早く見に行かない？」

「カラオケ行こうよ、平田く〜ん」

さっきの警告に、果たしてどれほどの効果があったのでしょうか。せめて無駄に散財しないことを願うばかりです。（合掌）

「うおー！やつとバスケが出来るぜ！」

そしてニワトリ頭の須藤君は、私との約束などすっかり忘れているみたいですね。好都合です。このまま無かった事に致しましょう。（確信犯）

結局、あつと言う間に教室は空っぽになってしまいました。さて、おバカさんたちは捨て置いて、次は敵情視察です。いまから行けば、十分間に合うでしょう。

「では、参りましょうか」

「なんでオレが同行する前提なんだ？」

「ダメ……ですか？」

必殺の上目遣いで押し切ろうとしましたが、なかなか彼は動きません。往生際が悪いですね。

「まさか、このあと何かご予定が？どうせおひとりなのでしょう？」

「それはお前も同じだろう？」

「いえ、わたくしはひとりを楽しんでいるのです。ぼっちのあなたとは違いますよ、綾小路君」

「……は、譲れません。」

「それ、完全に孤独と孤高を履き違えてるだろ」

仕方ありませんね。とっておきを出しましょう。

「一緒にいらして下さらないのなら、此処にべたんと女の子座りして……泣きます」

「……なぜだ？絵面的にとでもしつくりくる……」

「ふふふ……この場で葬って差し上げましょうか？」

不意に、彼の纏う空気が一変しました。

「お前にオレが葬れるのか？」

ひゃん♥こ、こんなところでいきなり本気を出さないで下さい。その目、その声……  
うう……こちらも色々出てしまいそうじゃないですか……(快感)

「・・・？」

ふう・・・どうやら何も気付かれてはいないようですね。あなたにはまだ早いです。

「ざざっ！はやく参りましょう」

私に急かされ、渋々ながらといった様子で歩き出す綾小路君。ふふふっ・・・素直な方は好きですよ。

「どうして、堀北や須藤を助けた？不安要素は早めに取り除いておく選択肢もあつただろっ？」

廊下へ出ると、彼が話しかけてきました。ほう・・・なかなかどうして、何ごにも興味が無さそうなふりをして、実はしっかり見ているではありませんか。それでこそ、最高傑作というものです。

「ふふふ・・・以前のわたくしなら、或いはそうしていたかも知れません。強硬策で臨んで独裁体制を敷けば、クラスを掌握するのは容易だからです。しかし・・・」

私は胸元に手をやり、深呼吸をしてから続けました。

「そのやり方では、長期的な安定を得るのは不可能です。必ずや不満分子が現れ、遠からずクラスは崩壊することになるでしょう。だからこそ、いまのうちにメンバー個々の力を底上げし、団結力を高める必要があると判断しました。その点、このDクラスは特定の分野に秀でた方が多くいらっしやるようです。それをわざわざ、自ら切り捨てるようなことは致しません」

「信念あつての行動、というわけか・・・」

私の長いセリフにも眉ひとつ動かさず、合いの手を入れる綾小路君。意外に聞き上手ですね。

「はい。わたくしはかつて、多くの方々に支えられ、先天性疾患を克服することが出来ました。そしてその経験から、ひとは互いに協力することで、より大きな困難に打ち勝つことができる、という事実を学んだのです」

「なら、お前が率いている限り、Dクラスは安泰なんだろうな」

第三者的な視点の発言で、彼は会話を終わらせました。まあ、あなたにはすぐ当事者になって頂きますけれど。ふふふ・・・

「俺は葛城康平という者だが、何の用だ？」

Aクラスから出て来たのは、かなり大柄な男子生徒でした。実力はいかほどでしょうか・・・あら?!このひと、頭が・・・否応なく視線がそこに吸い寄せられています。まあ、いわゆるスキンヘッドですね・・・(笑w)

「お前・・・いま何か、とてつもなく失礼なことを考えていなかったか？」

ふふふっ・・・私としたことが、最後の方は声に出してしまっていたようです。あと葛城君、それは主役級の女子キャラだけに許されたセリフ回しですよ？

しかしこの状況、もはや下手な言い逃れはききませんね。他クラスへご挨拶に来たはずが、いつの間にか喧嘩を売りに来たことに・・・素朴な疑問なのですが、私はいま、窮地なのでしょうか？



「坂柳、といったか？俺を愚弄するつもりなら、こちらにも考えがあるぞ」

あ！またしても声に出してしまいました。やはり窮地ですね、私。（他人事）

と、その時。

「誤解を与えたようなら悪かったな。あんたは頭が良さそうだ、と言いたかったんだ。しかし初対面で批評めいたことを口にするのは失礼だと思い、違う言葉を探していた。それだけだ」

私は半ば呆然と、綾小路君の長いセリフを聞いていました。彼がこんなに饒舌なこと自体、大変稀有なケースですが、まさかこれ程当意即妙な受け答えが出来るとは……いえ、彼の能力には全幅の信頼を置いていますが、殊、ひとの心の機微といったものには疎い、と思っておりますので……

「坂柳、お前はオレをいったい何だと思っているんだ？これぐらい、誰でもフォロー出来

るだろ」

「もちろん大切なおもちゃ・・・ケホケホ！お友達だと思っておりますよ。あと、そこでフオローと言ってしまった時点で失格です」

「そうか・・・今後、善処する」

そんな私たちの遣り取りを見ていた葛城君が、ふっと表情を緩めました。

「なるほど・・・第一印象が全て、というわけでもなさそうだな。では、そういうことにしておこう。ところでせっかくの縁だ。連絡先を交換しておかないか、綾小路」

「え?!いい、いいのか?」

一転して、嬉しさのあまり狼狽える(?)最高傑作。はあ・・・チョロすぎです、清隆君。



「あれで良かったのか？」

「ええ、十分です。Aクラスは優秀ですがそれだけです。放って置いて大丈夫でしょう。次はBクラスですね」

「まだやるのか・・・」

彼の呟きは聞こえなかったことにして、私はBクラスの入り口に立ちました。

「ごめんください。わたくし、Dクラスの坂柳有栖と申します」

「あ、こんにちはー！」

明るく応じてきたのは、正統派美少女を体現したような女子生徒。ひと目で分かりました。彼女は本物の天使だと。それに比べると、うちの墮天使榊 櫻さんさんときたら……（ぐつたり）

「私、一之瀬帆波つて言います。宜しくね！坂柳さんに、えつと……」

すかさず、私はフォローしました。

「彼は、わたくしたちDクラスの秘密兵器です。学校中を見渡しても、右に出る者はいないでしょう」

「……坂柳、もう少しまともな冗談は言えないのか」

「あら、全て真実なのですが何か問題でも？」

小さくため息をつく、彼は一之瀬さんへ向き直り、簡潔に自己紹介しました。

「綾小路清隆だ」

いや、いくらなんでも簡潔すぎませんか？

「・・・よ、宜しくね、綾小路君！」

するとにわかに顔を赤らめ、ぎこちなく挨拶を返す一之瀬さん。いまの微妙な間は何なのでしょう・・・ここへ来て予想外の展開です。敵情視察のはずが、まるで私が綾小路君と一之瀬さんを引き合わせたような形に・・・あとは若い人同士で。これではまるで、私が世話好きな親戚のおばちゃんみたいではありませんか。プンスカ！

「そ、それでふたりは何の用なのかな？」

まだ動揺しながらも、用件を尋ねてくる一之瀬さん。彼女が動くたびに強調される一部分は、もうセクハラ、いえパワハラです。絶対、私に当て付けているに違いありません。

ん。(被害妄想)

「どうした？一之瀬」

「なにかあつたの？帆波ちゃん」

すると、背の高いイケメンや、体育系の爽やか君、それに女子の面々も次々に集まってきました。まだ知り合ったばかりでしょうに、ずいぶんと仲がお宜しいことで。間違いないく、一之瀬さんはBクラスのリーダーなのでしょう。

そうだ、ちようど良い機会です。目には目を、歯には歯を、セクハラにはセクハラを  
！えい♥(脳内劇場開始)

「にゃん？ち、ちよつと・・・あ、あゝれゝ坂柳様、どうかお許しを」

「ぬはははは！良いではないか、帆波姫〜！」

・・・はっ?!ふう、危ないところでした。

「坂柳さん、いま何か失礼な場面を想像してなかった？」

「ひよ?い、いえまさか・・・それでは失礼致しますね」

「あ!待って!せっかくだし連絡先交換しておかない？」

「え?!い、いいのか？」

だから綾小路君、あなたというひとは・・・

「結局、何の用だったんだろう・・・？」

嵐のように去って行ったDクラスからの訪問者を見送りながら、ただただ、首を傾げるばかりのBクラスリーダー、一之瀬帆波なのであった。

「綾小路清隆君かぁ・・・ちよつと気になるな・・・」ポツ（帆波）

「綾小路清隆ぁ・・・ぜ、絶対に許さない・・・」ボソツ（白波千尋）





「なあ、いままで用件は果たせたのか」

「ええ、もちろん。Bクラスは和気藹々、団結力に優れているようですが、そこが弱点です」

「勝負に徹することが出来ない、か・・・」

「さすがです、綾小路君。さすがあや」

「なんだそれは・・・？」

そんな会話を交わしているうちに、私たちはDクラスまで戻って来ました。あ、Cクラスは何やら不穏な空気を感じましたので、素通りです。それにしても・・・

もぬけの殻になったDクラスの教室を眺めながら、私はある可能性に思い当たってしまいました。

優秀そうな生徒が多く見受けられたAクラスに、仲の良さそうなBクラス。Cクラスの全容は不明ですが、あまり『よい子』は居ない感じでしたので、A、Bには劣るでしょう。そして癡者、問題児だらけのDクラス。現にいまも、他のクラスはまだ教室に残っていたのに、我がクラスだけはこの有様です。

この学校のクラス分けには、何らかの意味合いがあるのではないか？私の中で、その疑念はどんどん大きくなってゆきました。もしかすると……

いいえ、結論を出すにはまだ判断材料が少なすぎます。取り敢えず、成果はありません。ここは一度、学生寮のお部屋を確かめておきましょうか……

そう考えて踵を返そうとした時、後ろから名前を呼ばれました。

「坂柳い！もう逃がさねえぞー！」

振り向くと・・・鼻息荒く迫って来たのは、バスケット大好き須藤君です。すっかり忘れてました。テヘ♪ていうか、高円寺君だけでも手一杯なのに、まさかあなたまで変態さん枠だったんですか?! (驚愕)

「ふははははっ! この二次小説が日間ランキング (加点・透明) 6位、ルーキー日間 (加点) 19位になったそうじゃないか。なかなかやるねえ・・・そうは思わないか、リトルガール」

「おや? その程度のこと殿方が狼狽える姿は、実にみつともないですねえ、六助ボーイ」

## 第5話：ドラゴンボーイと愉快的会長さん

— 学校生活は選ぶことの繰り返し。けれども選択肢は無限にあるわけではなく、考  
える時間も無限にあるわけではない。私たちに与えられた猶予は、僅か3年間だ —

BY 煉獄杏寿郎『鬼滅の刃』

「はあ、はあ……さ、探したぜ。さっきのloniの話、忘れてねえだろうな？」

バスケットボールを手に、詰め寄ってくる須藤君。呼吸も荒くて、みるからに変態さ  
んです。ちっ！ すっ！ すっかり忘れていました……仕方ないですね、さっさと終わらせましょ

う。

「ええ、もちろんです。では、どこで致しましょうか」

なぜか自分の言葉が卑猥に聞こえてしまうのは、きつと疲れのせいでしょう……

「おう！学生寮の近くにバスケットコートがあるのを見付けたんだ。そこでやろうぜ！」

まさに、好きこそものの上手なれ。その熱意を少しでも勉強に向けて下されば……ムリでしょうね。あと、意図的な誤字はやめて下さいいごめんさい。



ふう……須藤君は、まるで散歩に行きたくてリードを引つ張る飼犬のように、ものすごい勢いで私たちをバスケットコートまで連れて来ました。どれだけバスケット好きなの

でしょう。その興奮した様子に、かなりのギャラリーまで集まってくる始末です。あら、同じクラスの方々も、ちらほらと。これはもしかして、彼をアピールする絶好のチャンスなのでは……

「よっしやあ！じゃあ先攻は譲ってやるよ。かかってこいやー!!」

「承知しました。では綾小路君、どうぞ」

「は?!」

見事な男性二部合唱。合唱コンクールがあれば、優勝も夢ではないかも知れません。

「いや、オレは聞いてないんだが……そもそも、バスケをやったことがない」

ホワイトルームのカリキュラムにそんな盲点が?!偉そうな言いながら、いつたい何をやっていたんですか?綾小路パパさん!

「はあ？ど素人出してくるとか、舐めてんのかよ！お前が勝負するって言ったんだろ？坂柳！」

では、ここはひとつ、最高傑作清隆君にはじめてのおつかいパスケットボールをして頂くとしましょう。

「いえ、綾小路君は作られた天才です。影が薄いのは世を忍ぶ仮の姿。その正体は、とある施設であらゆる技能を身に付けた、いわば最高傑作なのです」

隠すからこそ、秘密は秘密足りえます。バラしてしまえば、それはもはや単なる妄想ストーリー……信じるか信じないか、それはあなた次第です。デデン！

「なにその痛い中二病設定……？」

「そ、その施設とは、シヨッカー？虎の穴？それともSOS団でござるか?!」

少なくとも最後のは違いますよ、外村君。

「なんかよくわかんねえけど、早くしろよ！」

ベッドの中でもせつかちな殿方は嫌われますよ、須藤君。

ボールを手に、まだ躊躇っている綾小路君に近付くと、私はそつと耳打ちしました。

「力を持っていながらそれを使わないのは、愚か者のすることです」

僅かに彼の表情が動きました。

「……どこでそれを？」

「ふふふっ……全力を出して下さいるなら、あとで教えて差し上げますよ」

これで須藤君の完敗は確定です。

「あのリングに入れればいいんだな？」



確認すると、彼はおもむろにボールを放ちました。美しい放物線を描いたそれは、微かな音を立ててゴールに吸い込まれ……

「え？」

乾いた音と共に地面を転がるバスケットボールと、固まる須藤君。ふふふつ……残念ですが相手が悪すぎましたね。

「ま、マジ……？」

「超ロングシュート？」

「ジョ、ジョーンズ!!？」

誰かいい加減、外村君を……いえ、何でもありません。

「く、くそ……！バケモノかよ……」

遂に力尽きたバスケット少年。お疲れ様でした。その後、lon1は予想通りの結果に終わりました。綾小路君は、この短時間で須藤君の動きやテクニクを吸収し、圧倒してみせたのです。まずはさすが、と言ったところでしようか。

「お見事です、綾小路君。素晴らしいプレーでした」

「相手が弱すぎただけだろ」

その言葉、後ろの彼には聞かせない方が宜しいかと。

「スゲえじゃねえかよ！悔しいけど俺の負けだ。つか綾小路！バスケット部入らねえか？お前となら、マジで世界狙える気がするぜ！」

本当に男子という生き物はチョロいですね。昭和のスポ根アニメの香りすら漂わせながら、須藤君は彼と肩を組んで青春しています。

ふふっ・・・あれでもう、親友になったつもりなのでしょう。いずれにしろ、綾小路君の実力の一端を見せつけることが出来ましたし、須藤君の懐柔にも成功です。我ながら完璧な結末。勝利を祝う今夜の晩酌は、ヤクルト1000を2本に増やすことに致しますよう。

「やだ・・・綾小路君って、かっこいい・・・」

「よく見たらイケメンじゃない？」

「あとで連絡先交換して貰おうかな・・・」

ちっ！このメス豚どもがっ！訂正。今夜の晩酌はネルノダに変更です！

「どうした？坂柳。なにか怒っているのか」

汗ひとつかいていない様子で、私に問う綾小路君。ええ、とつても怒っています。あなたの価値や苦しみなど、何もわかっていないニワカどもに。

そんな心の声を飲み込んで、私は今度こそ学生寮へ向かうことにしました。

「いいえ、なにも。それよりさっさとお部屋に帰りましょう。すっかり余計な時間を費やしてしまいましたから」

「そうだな」

ばらけ始めた見物客の人垣を避けて、私たちは足早にその場をあとにしました。

「それで、いかがでしたか？本気を出したご感想は」

これから毎日、通学路となる景色を眺めながら私は彼に尋ねました。

「特になんともないな・・・」

無表情に答える綾小路君へ、更に言葉をかけようとした次の瞬間、

「きゃ?!」

取り敢えずかわいい悲鳴をあげながら、私はバク転してそれを躲しました。てか、もしいまのが当たっていたら、R-18Gへのジャンル変更待たなしかったですよ？

「へっ！これを躲すとか、まともじゃないぜ。いままで、この不意打ちを避けることができたヤツはいねえ」

「これまでのお相手が、雑魚ばかりでいらしたただけでは？」

そこには、見るからに柄の悪い長髪男子とその手下の不良君1号、そして巨漢のサングラス黒人君にちよつと拗らせた感じの青髪美少女が居ました。これはまた、ずいぶん濃い面子を集めてきたものですね。

「クククツ・・・俺は龍園翔。Cクラスの王だ。まあ、今のうちにほざいておけよ。お前は最後に潰してやるぜ、坂柳有栖」

「あら、こちらがお呼び立てしたわけでもありませんのに、お仲間を連れてわざわざ自己紹介にいらして下さったとは・・・よっほどお暇なのですね、ドラゴンボーイさん？」

「てめえ・・・次にその呼び方をしたら・・・」

「おや、お気に召しませんでしたか、ドラゴンボーイ」

「てめえ!!」

空気を切り裂く飛び蹴りを紙一重で避けると、私は背後から彼の首筋にそつと手刀をあてがいました。チエツクメイトです。それなりの力はあるようですが、武道を習っている動きではありませんね。さしずめ、修羅場で磨かれた独学の戦闘スタイル、といったところでしょうか……

「次はありませんよ、龍園君?」

私は謎めいた微笑を浮かべて、怒り狂う彼を牽制しました。

「ちつ……!おもしろえ。いまはせいぜい、勝利の優越感を味わうんだな。だが俺はしつこいぜ?これから四六時中、お前を付け狙ってやる。飯を食ってる時も、寝ている時もだ。それこそ風呂や便所に居る時もな。クククツ」

「え?!りゅ、龍園君・・・?」

私は敢えて、弱々しい声を出しました。女子は誰もが女優さんなのです。ただし、演じすぎると榎田さんみたいになってしまいますが。

「どうした? 早速ビビってチビツたのかよ」

上手く韻を踏んだからってドヤ顔しないで下さい。それよりも・・・

「あなた、まさか・・・」

両手で自分の身体を抱きしめながら、私はぼつりと言いました。

「私のお風呂やお手洗いまで付け狙うとか、その顔でロリコンさんなんですか?」

「なっ?!」



「ぷっー！」

後ろの青髪さんが吹き出しました。彼女とは、今後お友達になれるかも知れません。

「クソが・・・お前は絶対に、潰す！」

「ええ、楽しみにしております」

怒りが収まらない様子のドラゴン君は、去り際に振り向くと、私の肩越しに揶揄するような視線を向けました。

「ククク・・・ひとつアドバイスしてやるぜ。手下はもうちよつとマシなヤツを選ぶんだな、坂柳」

はあ・・・やはりあなたも所詮、その程度ですか。綾小路君の実力に全く気付かないとは・・・それでは彼の相手など、100年経つても務まらないでしょうね。ごきげん

よう。



ドラゴンボーイと愉快的仲間たちが消え、再び歩き始めた私たち。綾小路君は何事もなかったかのように、会話を再開しました。

「あいつら、監視カメラの無い場所を選んできたな」

「むう・・・そんなことより、ここはまず『怪我はないか?』のひとことでしょうか?」

「なぜだ? お前、全く無傷だろ」

ダメです。会話が噛み合っていないですね。

「ところで、どうして助けられなかったのですか？」

そうやって恨めしげに彼を見上げましたが、大した反応はありません。

「あの程度の相手に、敢えて手助けするまでもなかったと思うが？」

つまり、もう私の技量を見抜いたと？

「たとえそうであったとしても、女の子は王子様に助けて欲しいものなのです。綾小路君は、もっと女心というものを学ぶべきですね」

「済まん……言ってる意味がよく分からないのだが。どうしてそこで、いきなり王子様が出てくるんだ？」

やはり彼とは一度、ゆっくりお話をする必要がありそうです・・・

## 中略

さて、どうしてこうなったのでしょうか？

「お前のような妹が居ると、恥をかくのはこの俺だ。今すぐこの学校から去れ、鈴音」

「嫌です兄さん！私は必ずAクラスに・・・！」

「無理だと言ったはずだぞ。また痛い目に遭いたいのか」

いま、私は学生寮の裏手で茂みに隠れ、お覗き……ケホケホ！偵察行動中です。ハードな入学初日が終わり、寛いでいた夜半過ぎ。寮の自販機へ飲み物を買に出た私は、何やら慌てた様子の堀北さんを見かけ、ストーキング……ゴホゴホ！あとをくつついて行ったら、兄妹の禁じられた遊びを見せられる羽目に。しかも背後には最高傑作の気配……

本当に彼ときたら、事なかれ主義とか言いながら、こうして陰でせっせと暗躍しているなんて……ふふふ、無表情なツンデレ少年なんて、かわいらしいじゃありませんか。

「?!」

と、堀北さんの足が宙に浮きました。これはさすがに不味いです。咄嗟に飛び出した私は会長の右手首を掴みました。

「なっ?!お前は……!」

「なっ?!ではありませんよ、生徒会長さん。ここで止めなかつたら確実に刑事事件になつてましたよね?詳しい事情は存じ上げませんが、シスコンも度を過ぎると嫌われてしまいますよ?」

「・・・その手を離せ」

次の瞬間、凄まじい速さで鼻先を掠める裏拳。バックステップしながら続く上段蹴りを躲し、伸びてきた左手も払い除けました。分かつてはいましたが凄い攻撃です。

「ほう・・・今のを躲すとは、何かやっていたのか」

「・・・空手と柔道、合気道に截拳道、それとマーシャルアーツを少々・・・」

あ、ネタではありませんからね?これらが全て免許皆伝とか、自分の才能が怖いです・・・テヘペロ(・ω<)

「それだけやっていたら、少々とは言わん・・・」

生真面目に答える生徒会長さん。ご本人はお認めにならないでしょうけれど、あなたと妹さん、そっくりですよ。頑固で融通がきかないあたりとか、特に。

「さ、坂柳さん？ どうしてあなたがここに……」

呻くように呟く堀北さん。大好きなお兄さんの前だからなのか、すっかりしおらしい態度になっています。その方が絶対にお友達が増えると思いますけど。

「なるほど……お前が坂柳有栖か。学科、面接ともに満点の首席入学だったのに、なぜかDクラス配属になったイレギュラー」

なんとまあ、個人情報ペラペラと。しかも特大のヒント付きとは、やっぱりあなたもツンデレさん?!

「あと、もうひとりも出て来い。そこに居るのは分かっている」

あつさり看破され、姿を現す綾小路君。まあ、半ば意図的な行動なのでしょう。

「お前は・・・確か、綾小路清隆だったな？入試結果が全科目50点だった・・・」

は？清隆君、あなた何をしているのです？力がありながらそれを使わないなんて、まさしく愚か者ではありませんか。

「鈴音、まさかお前に友達が居たとはな」

「いえ・・・このふたりは友達なんかじゃありません。事なかれ主義の隣人と、ただのつるぺたロリガールです」

なんつ?!わざわざ助けて上げたのに、その言い草ですか!?!てかその表現、無意識に高円寺君からパクりましたね？お父さんは、そんな品のないことを言う娘に育てた覚えはありませんよ！

「ふっ・・・お前がそんな言葉を口にするとはな。少しは成長したということか」



そこは叱るところでしょうか？お兄さん！

「・・・はっ?!そ、それは・・・はうう・・・」

お兄さんに指摘され、今さらながらに顔を真っ赤に染めて狼狽える鈴音さん。自分で口走っておいて、ブラコンのツンがデレるとか誰得ですか？それよりも、私の名誉はどうなるのでしょうか。

「50万PPだ」

すると、悶える妹を捨て置いて、唐突にお兄さんが告げました。え？まさか妹さんの恥ずかしい姿は有料配信コンテンツだったんですか?!しかもお高い・・・www

「ふたりとも端末を貸せ」

・・・なるほど。綾小路君は一部始終を撮影していたようですし、生徒会長としては

不都合な真実を買い取るつもりなのでしょう。なんでもポイントで解決するのが、このやり方……

「ほう……この額では不満か？」

私たちの反応が鈍いのを勘違いしたのか、生徒会長の眼鏡の奥に宿る殺気。ずいぶんせつかちですね。ならば……

「いえ、ポイントは要りません。その代わりに、私たちを生徒会に入れて頂けませんか？」

ここは単刀直入です。転がってきたチャンスボールは、しつかり決めましょう。

「ふっ……ずいぶんストレートだな。しかしその判断力、なかなかのものだ。この学校は実力至上主義。そして生徒会は常に有能な人材を必要としている……明日から来られるか？」

おや、まさかの即採用。ビズリーチ！その判断力、なかなかのものですね。（謎の上か

ら目線)

「はい、もちろんです。では、どうぞ宜しくお願い致します」

「こちらこそ宜しく頼む。ところで『私たち』と言うには、綾小路も一緒と考えて良いんだな？」

そこを拾って下さるとは、さすがです！会長。

「は？いや、オレは・・・」

「ええ、おっしゃる通りです。彼は作られた天才ですので、きつとご期待に沿えるかと」

他人事みたいに突っ立っていた綾小路君に反論の余地を与えず、私は言葉を被せました。何しろ彼は、ホワイトルームの最高傑作なのです。それなりの立場を与えたら、直ぐに学校中の注目を集める存在になるでしょう。今後は悪い虫(♀)が付かないように、定期的な害虫駆除が必要となりますね。(澱んだ目)

「そうか。期待しているぞ」

天才云々の部分は見事にスルーして答える、堀北学君。（さらっと友達扱い）ふふふ・・・たぶんこれから、この学校を揺るがす驚くべき展開が待っていると思いますよ、会長さん？

「いえ、だからオレは・・・はい、宜しくお願いします」ボソツ

そして、私と会長が放つ無言のプレッシャーに屈する清隆君。そうです、あなたはどんどん前に出てゆくべきなのですよ。

「そんな・・・坂柳さんはともかく、どうして綾小路君まで・・・？」

一方、やつと悶絶から立ち直り、戸惑うばかりの堀北妹。（呼び捨て）まあ、いまの彼女では、彼の実力を押し量ることなど不可能でしょう。あなたが毎日コンパス責めしている相手は、規格外の天才なのです。

「ふっ……どうやら、新しい風が吹き始めたらしいな」

口元を僅かに緩める、堀北生徒会長。こういうタイプの方は、放つて置いても勝手に自己完結してくれるので、手間がかからず楽ですね。

「鈴音、Aクラスに上がりたければ必死で足掻け。それと坂柳、お前は人を見る目も確かなようだ。生徒会の役員席にはまだ、若干名空きがある。これから誰か育ててみるのも一興だろう」

はあ……しちめんどくさいシスコンさんですね……私に妹の育成を丸投げするのは……もつと素直になれば、人生気楽でしょうに。

「ときに会長、あなたは『冴えない彼女の育て方』というアニメをご存知ですか？」

「ん？待て。あれは地味な娘をギャルゲーの主役に仕立てる話だ。そもそも鈴音とは根本的な立ち位置が違……はっ?!」

「え?に、兄さん・・・?」

ふふふっ・・・やはりあなたはシスコニアニメヲタクでしたか。生真面目で知的なイケメン眼鏡。実はそれこそが、オタクキーの外面的特徴のひとつなのです。おや?眼鏡が曇り始めましたが、どうなさったのでしょうか。一時的に不自然な体温の上昇と発汗量の増加が見られますよ?

「ふふっ・・・続きは会長のお部屋でお聞きしても宜しいでしょうか」

「な?!そ、それはダメだ!まだ橘も部屋に入れたことは無いのに・・・はっ?!」

「・・・兄さん。その橘という女は誰ですか?」(真顔)

ひよ?!堀北さんが一瞬でヤンデレに?!ここは即時撤退あるのみです。

「す、鈴音?どうして橘が女子だと分かったん・・・はっ?!」

動揺のあまり、自ら傷口を深くする生徒会長さん。ワロタｗｗｗｗ

「続きは兄さんの部屋で伺います」

「ま、待て！いますぐこの学校を去れ、鈴音！」

「この状況では全く説得力が感じられません。いったい何を慌てていらっしやるのです？兄さん」

一気に凄みを増す堀北ヤン音さん。大したものです。

「お、落ち着け。よし！お前の時間を言い値で買い取ろう。この学校では、ポイントで買えないものはない。いくらでもいいぞ、言ってみろ。そうすれば、作りかけの美少女フィギュアを隠す余裕が……」ボソツ

声に出ていますよ、会長さん。ワロタｗｗ

「このままでは、妹の私が恥をかくだけです」

「くっ！あとはせめて、朝潮型駆逐艦娘のセーラー服を片付ける時間さえあれば……はっ  
?!」

「セーラー服……橘……女子の影……いますぐお部屋に行きましょう、兄さん  
ハイライトオフ

「くっころ！」



「ふう……帰りましょうか」

実の妹に引き摺られる会長さんを見送ってから、私は口を開きました。子供には見せられない兄妹のプロレスごっこが、最後は笑えない結末に……タイトルをつけるなら、さしずめ『恐怖！機動ビグ・ザム』といったところでしょうか。やらせはせん！やらせはせんぞー!!（誤字）

「オレは初めて、恐怖というものを理屈ではなく感覚で理解した気がする」

彼がぼそりと呟きました。

「奇遇ですね。わたくしもですよ、清隆君」

こうして彼は、感情というものを学んでゆくのでしょう。それだけでも、この学校に来た甲斐があると言えるはずですよ。

「ところで坂柳、生徒会長の最後のセリフはどういう意味なんだ？」

あなたには、まだ早いです。

「大した意味はありません。カニクリームコロッケの略称ですよ。たぶん、晩ごはんのリクエストだったのでしょうw」

「もうひとつ、いいか？」

「ええ、どうぞ。ただし真剣交際の申し込みでしたら、もっと雰囲気のあるシチュエーションをお願いしますね」

「・・・さつきから、時々坂柳のセリフに付いてる小文字のwって、何なんだ？」

## 第6話：ようこそ独身至上主義の職員室へ

—— 過ちを気に病むことはない。ただ認めて、次の糧にすればいい。それが、子どもの特権だ ——

BY フル・フロンタル大佐『機動戦士ガンダムUC』

本格的に授業が始まりました。国立エリート進学校を謳うだけあって、学習内容もなかなかハードです。さあ、切磋琢磨しつつ、互いに高めあつてゆきましょう！ところが……

当初から危惧していた通り、山内君や池君、軽井沢さんあたりが元凶となつて、早くも授業態度が悪化し始めました。須藤君に至つては、居眠りをしそうになる体たらくです。しかも先生方は、誰ひとりとして注意をしないではありませんか!?!それを見て、私は改めて確信しました。私たちは泳がされているだけだ、と。後々、何らかの形で自らに跳ね返ってくるのは間違いありません。

そこで私は、次なる手を打ちました。そうです。クラスを崩壊させる要因になりそうな生徒に、お目付け役をあてがったのです。

「余計な負担をお掛けして申し訳ありません。ですが、この役回りは貴女にしか出来ないことなのです。どうか、引き受けて頂けませんか」

「うん！わかつたよ坂柳さん。クラスのためだもん！私に出来ることなら何でもするよ！」

承認欲求の塊さんは、コロツと騙されてくれました。でも、あざといガッツポーズは不要です。

「無理なお話をごめんなさい。ですが、どうしてもあなたのお力添えが必要なのです。どうかご協力願えませんか」

「もちろんだよ坂柳さん。僕はこのクラスのためなら、どんなことだって協力する」

クラス随一のイケメン好青年も、力強い言葉で請け負ってくれました。いずれ、暗黒面に堕ちた彼も見てみたいものです。

そして・・・

「山内君、わたし、毎日の授業を大事にするひとつて素敵だなあって思うなっ」

「そ、そうだよな櫛田ちゃん！お、俺はやるぜえ！」

おバカな男子には、エセ天使櫛田さんを。

「軽井沢さん、高校生らしく授業に集中しないか？それが出来る女子はとても魅力的だと、僕は思う」

「ひ、平田君・・・あたし、頑張るね♥」

アホな女子には、みんなのヒーロー平田君を。

ちなみに須藤君には、居眠りを我慢すれば『放課後に綾小路君とバスケットをする権利』が与えられることになりました。

「オレはなにも聞いてないんだが・・・」

「いつの時代も、少数意見は無視されるものですよ、綾小路君」

さて、やっつけ仕事での対応でしたが、なんとこれが効果てきめん。やはり愛は地球とDクラスを救うのですね。（違う）

いまだ、クラス査定の詳細は分かりませんが、授業態度の改善は相当なプラス効果があるはず。来月1日が見ものです。さあ、引き続き頑張っていきましょう！（睦月ちゃん）いえ、中のひとが同じですから。

では、次回予告です・・・

はい？え？例の件について・・・？やはり覚えていらっしやいましたか。さすがです、読者の皆様。



そうです。入学初日、私はハイキック2発で高円寺君を沈めました。我ながら、字面にするとすごいですね。そして当然、その行為は監視カメラに捉えられていたはず。つまり、この件を解決しない限り、私個人もDクラスも、枕を高くして眠ることが出来ないのです。でも大丈夫。ちゃんと手は打ちましたから。

では、回想シーン、リンクスタート！あ、作品を間違えてしまいました。

入学式翌日。私は、重い足取りで職員室へと向かっていました。昨日の一件の後始末をするためです。冷静沈着、頭脳戦が得意な私としたことが、あり得ないミスをしてしまいました。事態を丸く収めるには、相応の代償を求められることでしょう。一方の当事者である高円寺君を巻き込むやり方もありましたが、リスクを考慮すると安易なことは出来ませんし・・・

「ふははははっ！この私を待たせるとはさすがだねえ、有栖ガール」

なんと、職員室の出入り口で壁に寄りかかっていたのは、他ならぬ高円寺君でした。

「おや、こんなところに何の用です？六助ボーイ」

「おそらく、君らと同じ用件だろうねえ」

小型の櫛で髪を梳かしながら言う自由人さん。どういう風の吹き回しでしょうか。  
まさか……

「おっと、余計な探り合いは無しにして貰いたいねえ。私は無駄な行為は嫌いなのです。  
美しくないからね」

「分かりました。ではご一緒致しましょう」

「その前に、後ろの綾小路ボーイは付き添いかね？」

「いえ、お気になさらず」

そう答えて、私は職員室の入り口をノックしました。

「失礼します。1年Dクラスの坂柳有栖です。茶柱先生はいらっしゃいますでしょうか」

見たところ、大半の教職員は出払っているようです。これは訪問のタイミングを誤りましたね……

「あ、坂柳さんだ♪サエちゃんならそろそろ戻って来ると思うけど、どうしたの？」

やけにフレンドリーなこの女性は、確かBクラスの担任、星之宮知恵先生・・・でしたか。まるで、あざとさが服を着て歩いているようなひとですね。ん？じゃあ服を脱いだら、あざとくなくなるんでしょうか？（愕然）

「いえ、ご不在でしたらまたにします。失礼致しました」

私は即座に戦略的撤退を選択しましたが、ここは相手が一枚上手でした。

「もう！待ってよお。用件くらい教えてくれたって良いじゃない！場合によってはお姉さんが解決してあげちゃうぞ？あ、言い忘れたけど、私はBクラス担任の星之宮知恵。サエちゃんとは同期で、お互い名前呼びする仲なんだ」

うざいです。

「分かった！早速二股かけてトラブったなあ？お人形さんみたいな可愛らしい顔して、このおませさんめっ！でも正直、そのふたりなら、どっちが良いかなんて一目瞭然じゃない？」

妄想ストーリーを語りながら、私の頬をつんつんしてくる女教師。このひとが担任でなかったことを、私は密かに感謝しました。監視カメラがなければ、ますますぐぶちのめして差し上げ……

つと、同じ過ちを繰り返すのは、愚か者のすることでした。ここは彼女のお望み通り、暫くお人形さんになってやり過ぎすとしましよう。

「あくほんと、ちっちゃくってかわいいなあ〜ねえ、いまからでもうちのクラスに来な  
いっ。」

ひたすら無の境地で耐え忍んでいると、突然小気味よい音が響きました。

「いったーい！なにをするの、サエちゃん!？」

「私の生徒に絡むな、星之宮」

冷たく言って、クリップボードを手にしたまま席に座る茶柱先生。あれは痛そうです。

「迷惑かけたな。で、なんの用だ？」

前置きなく本題に入る、我らが担任教師。こういったドライな対応、嫌いじゃありません。一瞬、高円寺君に視線を送ってから、私は話し始めました。

「はい、昨日の件についてなのですが・・・」

「ああ、あれか。なかなか良い蹴りだった」

ほう・・・こうもあつさり認めますか、私たちが常時監視しているという事実を。

「え?! なになに? 有栖ちゃんが蹴り? あなたまさか、ハードプレイが好みなの?」

「お前は黙ってろ、チエ」

あら、やっぱりおふたりは仲良しさんなのですね。

「それと高円寺、セクハラ発言は慎め。婚期を逃すぞ」

やけに感情のこもった口ぶりで、茶柱先生は忠告しました。いやそれより、男子生徒にその言い方はどうなのでしょうか・・・

「そうそう、気を付けてよ。目の前に反面教師がいるもんね・・・あいたつ！」

再び良い音を立てるクリップボード。

「お前も同じだろ！」

「いったーい！私は違うよ？その気になれば、キープ君が何人も居るし」

取り敢えず、アレは無視です。

「ははははははっ！ご忠告、痛み入るねえ。しかし年増の売れ残りは言葉の重みがt・・・  
うわらばっ！」

「お前は実に愚かだな」

同感です。

一撃で金髪ボーイを葬った茶柱先生は、ゴミを見るような目で吹き飛んだ彼を一瞥しました。ふはははははっ！実にいい気味だねえ。（モノマネ）

一瞬、思考が乱れてしまいましたが、気を取り直して私は続けました。

「あれに関して、一切言い訳は致しません。わたくしに何らかのペナルティーが課せられることは理解しています。その上で敢えてお聞きしますが、この問題を解消するには何ポイント必要ですか？」



私の言葉に、スツと目を細める担任。纏う空気が変わりました。やはり・・・

「どうやってその結論に達した？ 良ければ聞かせてくれ」

探るような、試すような、それでいてどこか期待も滲ませた口調で問う茶柱先生。さあ、答え合わせの時間です。

「先生は昨日、Sシステムを説明なさった際におっしゃいました。ポイントで買えないものはない、と。ですから今回の件も、ポイントによって何らかの解消方法が購入可能なのではないかと解釈したのです」

さて、この答えは何点くらいでしょうか・・・

「ふっ！ 素晴らしいぞ！ ほぼ満点だ、坂柳。その解釈で間違いない。で、ひとつだけ確認しておきたいのだが、なぜ『解決』ではなく『解消』と表現した？ 聞かせろ」

「はい。いくらポイントを積もうと、事実を覆せません。それでもなお、その事実を手を

加えようとするならば、それは解決ではなく解消と言うべきだと判断致しました」

「ふはははっ！ 実に興味深い。入学2日目ですこまで把握するとはな。良かろう。昨日のケース、本来なら問題行動案件だが、無かった事に出来るぞ」

ほぼ予想通りですが、倫理的にはいかなものでしょうか、それ。

「有り難うございます。それで、必要なポイントは・・・？」

決して安くはないでしょうけれど、新入生という事情は考慮されるはずですよ。

などと甘い考えを抱いた私がおバカさんでした。

「そうだな。新入生という事情も考慮すると、10万ポイントで足りるだろう」

「!？」

・・・やられました。どうも話がうますぎるとは感じていましたが、さすがに手持ちの全額を要求されるとは予想外です。しかも、すでに生活必需品の購入に多少使ってしまったので、この場でぴったり10万ポイントを用意することは出来ません。それにもし払えたとしても、ゼロポイントで来月までどうやって暮らしてゆけと言うのでしょうか・・・

ひとはパンのみにて生きるにあらず。特に女の子は、その他色々と必要なのです。貴女も同じ女の子なら、お分かりでしょう？あ、ごめんなさい。もう女の子っていう年頃ではありませんでしたね・・・

「貴様・・・いま何か、とてつもなく失礼な・・・」

あと、それもいいですから。

「まあいい……本校は無料商品もあるからな。それを活用すれば、取り敢えず死にはしない」

してやったり、といった表情の茶柱佐枝。こんな教育者の風上にも置けない輩、呼び捨てで十分です。

「その点はご心配なく。綾小路君のお部屋を間借りして同棲する予定ですので」

「え?!」

私の背後でずっと置き物だった彼が、初めて声を上げました。

「きゃー!坂柳さん、大胆!」

茶化す星之宮。(もはや呼び捨て)あれも大概ですね。

「なっ?! さすがにそれは風紀上、認めr・・・」

狼狽える茶柱先生の言葉を遮って、私は言葉を重ねました。

「男子が女子寮に居られるのは午後8時までと聞きましたが、その逆パターンに関する規定は明文化されていませんでした。よって、なんら問題ないかと」

「くっ・・・! 屁理屈を・・・」

「あくそうきたかあ・・・正直、これまで間違いが起こらなかった方が不思議なんだよね  
く私だったら確実にヤツちやつただろうなく」

「生徒の前だぞ! 真面目にやれ、チエ!」

なんとなく、ふたりの関係性が見えてきましたね・・・すると、先ほど一撃を浴びて  
からずと沈黙を守ってきた六助ボーイが、口を開きました。

「なるほど・・・理解したよ、茶柱ティーチャー。つまり、初めからトラブルなど存在しなければ良いのだろうか？」

その言葉に、私はハツとしました。まさか彼も、そのやり方を・・・

「有栖ガール、君の目のつけどころはなかなかインタレスティングだったが、そもそもの大前提が間違っていたのだよ。昨日、君と私の間には何のトラブルも無かった。そうだろうか？」

「ほう・・・だそうだが？坂柳」

悔しいですが、ここは彼が敷いてくれたレールに乗るしかなさそうです。

「はい、わたくしの思い違いだったようです。お手間をおかけし、申し訳ございませんでした」

育ちの良さを思わせる動きで、私は礼儀正しくお辞儀しました。あ、自分で育ちが良

いとか言ってしまった。ふふふ……

「分かった。話はそれだけか？なら早く帰れ」

「いいえ、最後にいくつか伺わせて頂きたいことがあります」

予定では、他クラスを出し抜くための切り札として、内密に尋ねるつもりでしたが……高円寺君へのお礼も兼ねて、いま聞いてしましましょう。

「なんだ？手短かに頼む。このあと職員会議なんだ」

「え？サエちゃん、今日はもう、なんにも予定は無いよ？」

「このバカ……！」

ふふふ……明らかに逃げ腰ですね。なにか不都合な真実でも隠しているのでしょうか。

「ではまず1点目。来月振り込まれるのは、何ポイントですか？」

「それは・・・答えられない」

でしようね。

「次に、学校側は個人とクラス、どちらの単位で私たちを評価するのですか？」

「・・・ケースバイケースだ。近いうちに明らかになるだろう」

それは来月1日のことですね。

「最後です。AからDまでのクラス分けに、何か意図はありますか？」

「詳しい基準については部外秘だ」



つまり、意味がある、と。

「有り難うございました。大変参考になりました」

結局、なんにも答えてませんよね、茶柱ティーチャー？

再び優雅に一礼して、私は職員室を後にしました。



「高円寺君、まずはお礼を申し上げておきます。先ほどは有り難うございました」

職員室を出ると、私はもう一度、頭を下げました。感謝すべき相手には、礼を尽くさ

なければなりません。たとえそれが、クラス随一の変人さんであったとしても。

「ふむ、頭を上げてくれたまえ、有栖ガール。それを言うならお互い様だろうねえ。君の蹴りは完全にアウトだったが、私の言動にもマズい点があったのは事実さ」

「つまり、貸し借りは無し、と?」

「その通りさ。それに、貴重なヒントも頂いたことだしねえ」

「承知致しました。では今後とも、宜しくお願いしますね、高円寺君」

私は本音の6割程度で微笑みました。

「ふむ・・・なかなか気に入ったよ、ミス坂柳。どうかな?このあとケヤキモールから私の部屋まで、フルコースでエスコートしてあげようじゃないか」

「その前に、わたくし渾身のハイキックはいかがですか?」

「ふははははっ……いや、遠慮しておこう」

こうして、危険極まりない自由人は去って行きました。

そしてあとには、立ち尽くす私と彼。

「……なにか言ってください、綾小路君」

「お前はオレになにを期待しているんだ？坂柳」

やはり聞いたわたくしが間違っていました。ですが、明日からはもっと楽しいことに

なりそうですね。

「そうか・・・良かったな」

まるで他人事の綾小路君。

「おや、明日からはあなたにも、本気を出して頂きたいのですが」

「いや、オレは平穩無事に過ごせればそれでいい」

「では、本気を出すつもりは無い、と？」

「ああ、下手に目立ちたくない。オレは事なかれ主義なんだ」

ただひとり、あのカリキュラムを突破したあなたの言うセリフではないですね。

「残念ながら、それは難しいでしょう」

「なぜだ？」

「この学校は実力至上主義の世界です。早晚、本気を出さざるを得ない事態が訪れるでしょう。手を抜いていたら、それこそあなたの求める平穏自体が、奪われてしまうことにもなりかねませんよ」

一瞬、言葉に詰まる綾小路君。目立たず過ごすために、目立つ行動を強いられる。さあ、この二律背反にどう対処しますか、清隆ボーイ。

「そんなに・・・オレの力が見たいのか・・・」

なっ?!まさかのアスロツク清隆?!ならば私がトマホーク有栖・・・(意味不明)

「目立つことを嫌っておられるようですが、始めから目立っておけば、直ぐにそれが当たり前の日常になりますよ。それに・・・」

私は核心を突くことにしました。

「あなたはお友達が好きなのでしょう？」

「・・・否定はしない・・・」

ふふふつ・・・やはりそうでしたか。

「教室での物欲しそうな態度に、昨日の葛城君や一之瀬さんとの遣り取り。それらで確信しました。ならば積極的にその実力を示して、人望や尊敬を集めるべきです。そうすれば、たちまちあなたのスマホはみんなの連絡先で埋まることでしょう。名付けて『ともだち100人できるかな作戦』です」

この作戦名はダメですね・・・

「・・・ちなみに聞きたいんだが、もし積極的に動かなかつたら、オレはどうなるんだ？」

「卒業まで3年間、お友達は右手と堀北さんだけになるでしょう」

「そうか・・・」

初めて、彼の表情がはつきりと動きました。あとひと押しです。

「作戦のネーミングセンスはともかく・・・本当に、そんなことが可能なのか？」

「堕ちましたね・・・www」

「もちろんです。いまなら特別に、妹みたいな可愛らしい彼女もお付けしますよ」

「やっぱり止めておく・・・」

「なぜにっ?!

「壮大な下心を感じた・・・ような気がしたからな」

「では決まりですね。見せて頂きましょうか、最高傑作の實力とやらを！」

「話、聞いてるか・・・？」

「じゃ、そろそろ帰りましょう」

ゴリ押しで会話を切り上げようとしたその刹那・・・

「坂柳、ひとつ教えてくれ。どうしてオレに関わろうとする？お前なら、他にいくらでも相手は居るだろう？」

「!!」

思わぬ言葉に、一瞬反応が遅れてしまいました。そうです、彼は作られた天才。勉強、運動ともに死角は無いでしょう。しかし、感情というものに関しては、まだまっさらに近い状態です。文字通り、あのお部屋と同じ真っ白な器。高校3年間で、どんな色にも



容易に染まってしまうでしょう。なればこそ、ここでウソやごまかしを返すわけには参りません。

私は本心を打ち明けることにしました。初めて会った時からずっと、この胸の奥深くに仕舞っていた気持ち。

「・・・あの日以来、わたくしは、あなたのことが知りたくて知りたくて仕方がないんです。ずっとずっと追いつけてきた、出会うことのなかった幼馴染のような心境なんです・・・」

そう告白して、そつと彼の手を握りました。絡み合う互いの視線。きつと私の顔は、真つ赤に染まっているに違いありません。いま、あなたの目に私はどう映っていますか・・・

「綾小路君、人の温もりも悪くないものです。どうか忘れないで下さい」

嗚呼、願わくば、この想いが伝わりますように。あなたがあなたらしい色に染まりま

すように・・・

「確かに温かいな。36.4℃くらいか？」

「・・・綾小路君・・・女子の基礎体温を言い当ててはいけません」ボソツ

## 第7話：スクール水着でごきげんよう

— 真実は残酷だというのなら、きつと嘘はもつと残酷なのだろう —

B Y 比企谷八幡『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』

「おはようございます。皆さん、何をしていますか？」

4月も下旬に差し掛かったある日。始業前から例のおバカさんたちが、タブレットを囲んで何やら盛り上がっていました。なぜか女子からは総スカン状態です……

「ん？おはよう坂柳ちゃん。そりゃ、今日プールの授業だろ？だからDクラス女子の胸の大きさを賭けているんだよ……あっ!？」

興奮のあまり、口を滑らせる山内君。やはりバカですね。

「なるほど・・・では現在、わたくしの順位はどれくらいなのでしょうか」

「え?! そ、それは・・・」

「ちよつとお借りしますね」

タブレット画面にずらりと並んだ女子の名前。長谷部さんと佐倉さんがダントツ人気で、櫛田さんが僅差で続いています。わたくしの名前は・・・おや、選択肢にすらありませんね。ふふふ・・・彼らには一度、痛い思いをして頂きましょう。

私は何度か画面をタップしてから、タブレットをお返ししました。

「山内君のお名前で、わたくしに1票入れておきました」

「ええ?!そんなの、はじめから賭けにならないじゃん・・・」

今日の私は、危うくハイキックを我慢しました。そうです、人間とは、教訓に学ぶ生き物なのです。



「さっきの池君たち、最悪じゃない?」

「ほんとキモいよ!私、今日の体育、休むから!」

「わ、私も・・・見学しようかな・・・」

男子が更衣室へ移動し、女子だけになったDクラスの教室。変態どもが待ち構えるプールから逃れようと、ズル休みを宣言する佐倉さんや長谷部さんでしたが、許すわけにはいきません。

「皆さん、お気持ちはよくわかりますが、大量の見学者を出すのはクラス査定に影響する可能性が高いです。つまり、来月のポイント支給額に影響かと・・・」

「そ、そっか！」

「で、でも・・・」

まだ踏ん切りがつかない彼女たちに、私はとっておきのひとことをぶつけました。

「よくお考え下さい。わたくしも水着で参加するのですよ？」

「あ・・・いめん」

なぜか非常に腹立たしいものがありますが・・・初めに申し上げた通り、学業、武術ともに完成された私。身体的にも、まだまだ伸びしろがあるはずです・・・たぶん、Maybe・・・

そして誰ひとりとして欠けることなく、重装歩兵の長谷部、佐倉、櫛田三銃士を先頭に、私たちDクラス女子軍団は屋内プールへ進攻を開始しました。

「うおおおおお!!」

迎え撃つのは、辺りの空気を震わせる、思春期男子の雄叫び。もの凄い圧力です。あのリビドーを正しい方角に向ければ、日本が抱える諸問題なんて一発で解決することでしょう。

「水泳の授業、楽しみだねっ！池君？」

おっと？水着姿を晒して羞恥心が麻痺してしまったのでしょうか。墮天使櫛田さんが、見事な先制攻撃です。彼女を間近で見た男子諸君は、なぜか次々と礼儀正しく体育

座りをし始めました。おそらく、勃っていられないのでしょう。（誤字）

「ふふふ．．．男子の皆さんもごきげんよう」

私が歩み寄ると、ギラついた欲望塗れの目をしていた山内君や池君が、一転して父親が愛娘に向けるような生暖かい眼差しになりました。

「た、助かったぜ坂柳ちゃん。俺、もう限界だったんだ」

「マジ天使だわ坂柳」

「つるぺたは正義。はっきりわかるのでござる」

どうやら私の水着姿で、彼らは正気を取り戻したようです。許すまじ。

さて、綾小路君は．．．やっぱり、端っここのほうで所在なく佇んでいました。さすが、細身ながら素晴らしい肉体です．．．



は  
???

なんと！堀北さんが彼にちよつかいを出しては  
ありませんか?! あ！お腹をつ  
んつんした?! まだ私も触ったことないのに！羨まけ  
しからん！それは私の役回りです  
!

それにしても・・・入学式当日のヤンデレ騒動以来、堀北さんは明らかに変わりました。何か、全身から溢れ出るものがあるのです。お兄さんとの間に、何があったのでしょうか。これは是非とも、確かめておく必要がありますそうですね。

「こんにちは。わたくしも混ぜて下さいな、デレ北さん」

「その言い方はやめて」

おや、まだまだツンが抜けてはいないようです。

「おお、坂柳か。助かった・・・もう少して、初めての敗北を知るところだった」

ていうか清隆君、あなたもですか?!

「ところで堀北さん。先日的一件事は、その後どうなりました?」

「ここは敢えてド直球を。不意について本音を聞き出す作戦です。」

「私、兄さんの背中を追うことはやめたの。だからあの日、兄さんがずっと大切に守り続けていたものを無理やり奪ってやったのよ。ふふふ・・・あんな兄さんを見たのは、生まれて初めてだったわ」

「なっ?!」

お兄さんの初めてを・・・?これはいけません。至急、作品タグを変更・・・じやなかつた。とにかく一度、落ち着きましょう・・・でも、まさかあの堅物兄妹が、ふたりつきりのお部屋であんなことやこんなことを・・・

(脳内妄想劇場開始)

「ほう．．．完璧だ。よく似合っているな、鈴音」

「に、兄さん．．．本当にこれで、私はAクラスに上がれるのでしょうか？そもそも、この制服はいつたい．．．大洗女子学園？」

「気にするな。じゃあ次は、この咽喉マイクを付けてみる」

「ま、待つて下さい．．．いくらなんでもスカートが短すぎます」

「そんなことに気をとられていたら、いつまで経っても俺の背中には追いつけないぞ？」

「で、ですが．．．」

「股を開け」

「に、兄さん♥?」

(脳内妄想劇場おわり)

・・・ひゃん♥? 私も体育座りをしなければ、色々漏らしてしまいそうです・・・へ  
ナヘナ(腰砕け)

side 堀北鈴音

え?! 坂柳さん、急にどうしたのかしら? 私は単に、兄さんの部屋にあった変なお人形や女子学生用の制服を不燃ゴミに出しただけなのに。でも、あの時の絶望に染まった兄さんの顔、本当に見ものだったわ・・・

突然、腰を抜かしてしやがみこんだあと、凄まじい勢いでプールへ飛び込んだ坂柳有栖の姿に、首を傾げるばかりの堀北鈴音なのであった。（委細省略）

ふう・・・危ないところでした。木は森に隠せ、びしょ濡れはぶ濡れで隠せ。なんとか間に合いましたね。ボソツ

## 最終話：そして始まりの終わり

——最終回がコレかよ、とミサカは嘆息します。もうちょっとマシなものは書けなかったのかよ、という本音を胸にしまつて、ミサカは深く嘆息します。——

B Y 御坂妹『とある科学の超電磁砲』

さて、恥辱にまみれた水泳授業から1週間。忙しいゴールデンウィークを過ごしたあと・・・運命の日がやって来ました。

5月1日。私の予想が正しかったかどうかは、これから茶柱先生を見れば分かるはずです。というか、今朝のポイント残高がすでに答えなんですけど。

「お前たち、席に着け」

いつもどおりクールに登場した担任は、ゆつくりと私たちを見回しました。朝のざわめきがぴたりと止み、静寂に包まれる教室。

「なにか質問はあるか？ないな？では話を進めるぞ」

対するクラスメートたちはみんな、ぼか〜んとしています。そうです。今朝の茶柱枝（29）独身は、いつものスーツではなく、ゴスロリなメイド服にエプロンを付けた姿なのです。ギャップ萌え〜!!?

「さ、サエちゃん先生？な、なんかありました？」

勇敢にも、私を除くクラス全員の想疑問いを乗せて、池君が切り込みました。間違いありません。彼は勇者です。

あ、ちなみに先日、私は茶柱先生にポイントを支払って、あるお願いをしました。次のポイント支給日、満足のいく結果だったらメイド服姿で登場して欲しい、と。半ばネタだったのですが、まさか年甲斐もなく本当にやるとは。茶柱の本気を見るのです！

『サエちゃん』って言うのと『チエ』って言う。『なぜ』って言うのと『答えられない』って言う。こままでしょうか。いいえ、茶柱です。

「なにもないぞ。ところで諸君、これを見たまえ」

池君のツツコミを完璧にスルーして、模造紙を広げるサエちゃん。そこには、大きく数字が書き込まれていました。

クラスポイント一覧（5月1日時点）

Aクラス 0

Bクラス 650

Cクラス 490



## Dクラス 900

ほう・・・そうになりましたか・・・w

「お前たちは実に優れた不良品だな」

そして、意味不明な言葉の後で明かされる、この学校の真実。クラスポイント、プライベートポイント、クラス間競争、Aクラスのみを進路幹旋特典、特別試験、そして退学処分・・・お父様ですら教えて下さらなかつた、禁則事項の数々です。なるほど・・・こういうことだったのですね。

「ふはははははっ！これは実に傑作だ！はじめの一手で王手とは、チートが過ぎるというものだねえ、メイドティーチャー。有栖ガールの推測は大当たりだったというわけだ！」

高円寺君の高笑いと重なるように、他クラスからは阿鼻叫喚が漏れ聞こえてきま

す……

「遅刻欠席、授業中の私語にスマホいじり、居眠り、爪の手入れ、早弁、エスケープ、スカートめくり、万引き……そして星之宮教諭の下着窃盗未遂……」

ほほう……たぶん、大半はドラゴンボーイさんたちの所業だと思えますが、ひとつだけ明らかに、六助ボーイが混じっていますね。それと、男子小学生レベルの愚行を働いたおバカさんは誰なのでしょう？あと最後のは間違いなくチエの狂言です。（きつぱり）

「これらはこの1か月で、実際に各クラスが起こした問題行動だ。Aクラスは万引き行為が発覚し、すべてのクラスポイントを失った。一方、このDクラスは……まあ、そういうことだ。ゆえに、今日からお前たちがAクラスとなる」

あら、コンビニで見かけた神室さんって、Aクラスの方だったんですね……（他人事）

さて、取り敢えず初戦は勝ちました。これから私は前面に出て、クラスを引っ張って

ゆくつもりです。生まれながらの天才である私と、ホワイトルームの最高傑作が協力すれば、これから3年間、どんな試験が来ても完勝間違いなし。自分が負ける姿を想像出来ません。尤も、物語としては全然面白味がありませんけど。(結論)

はっ?!そうです!卒業間近に私だけDクラスに移籍して、Aクラスを率いる本気の彼と対決する、というのはどうでしょう。我ながら妙案だと思うのですが・・・あれ?なぜかデジャヴ・・・(気のせい)

「やったぜ!俺ら、人生勝ち組だ!」

「これで買い物し放題じゃん!」

「夢のヲタク系YouTuberデビューが現実になるでござんー!」

一方、周囲に溢れる喜びの声。やはりここはアホ揃いですね。卒業までは、あと3年弱ありますよ?この様子だと、来月にはDクラスへ逆戻りでしょう。あくまでも、学校がいまの仕組みのままならば、ですが・・・(意味深)

「Dクラスが入学後1か月でAに上がったのは、本校創立以来、初の快挙だ。このまま抜きかりなく、卒業まで突っ走ってくれ」

嬉々として話すサエ。しかし・・・

茶柱先生の説明を聞きながら、私はすでに結論を出していました。これはダメです。こんな箱庭の中で電子マネーの獲利合いをしたところで、未来の日本を担う人材など育つはずありません。お父様の気苦労が、透けて見えるようです。ならば、自らの手で変えてみると致しましょう。さて、そろそろかと・・・

「全校生徒にお知らせします。本日午後、体育館で臨時の生徒総会を開催致しますので、必ず参加して下さい」

生徒会による校内放送。橘書記の声ですね。今後、ヤンデレ鈴音さんとの修羅場が見ものです。（期待大）

「あら、義姉さんだわ」

と、直ぐに反応する堀北さん。ほう、すでにお姉さん呼びですか。ずいぶん仲良くなられたんですね・・・えっ?!お義姉さん?!(一文字違い)

衝撃のひとつことにツツコミすら忘れた私は、ゴールデンウィークの出来事を思い出していました・・・

〽 数日前 生徒会室 〽

「・・・以上2名が新たに執行部へ加わった。宜しく指導してやってくれ」

生徒会長の言葉に、私と綾小路君は改めて一礼しました。これで私たちは、晴れて生徒会のメンバーです。もちろん、わざわざゴールデンウィーク中に登校しているのは、顔見せのためだけではありません。

「では次に、早速だが坂柳から議題が提出されている。審議を始めようか」

淡々と話を進める堀北会長でしたが、南雲副会長が待ったをかけました。

「その前に会長……それは何ですか？」

彼が指差したのは、資料棚の上に置かれた物体です。

「ん？知らないのか？これはプリキュアシリーズのねんどろいどだ。しかもリペイント済みのな」

事も無げに説明する堀北君。どうやら吹っ切れ……いえ、ぶっ飛びましたね。恐るべし、堀北鈴音。あなた、兄さんに何をしたのです？

「いや、そう言うことじゃなくて……では、後ろのそれは？」

今度は、壁にハンガーで吊るされたセーラー服です。もちろん、本校のものではありません。あれは確かに私も気になっていました。

「ああ、あれか。吹雪型の制服だ。しかも改二バージョンのレア物だぞ？」

「……わかりました」

なぜか遠い目で引き下がる南雲副会長。書記を務める橘さんも、何かを諦めたような素振りで会長の方を窺っています。そうです。歴代最高と称される堀北生徒会長は、自らの趣味を全面に押し出す決意を固めたようなのです。（一大事）本来なら、これを真っ先に審議すべきですよね。

「話を戻すぞ。坂柳、始めてくれ」

「はい。では皆さん、こちらをご覧ください」

私は耳あてを付けると、自分の端末をポイント表示画面に切り替えて、周囲に翳しました。

「え．．．??ええええええええ?!」

突然、合唱コンクールを始める先輩方。素晴らしいハーモニー．．．というより爆音です。やはり、耳当てを用意したのは正解でした。綾小路君も、絶妙なタイミングで耳を塞いでいましたし。

「マジか?!」

「な、なんだよそれ?」

「信じられません．．．」



上から順番に、南雲副会長、庶務の桐山先輩、橘書記です。って、私は誰に何を説明しているのでしょうか？

「さすがに予想の斜め上に行く額だな。それだけあれば、自主制作の萌えアニメを作れるぞ……」

そして、ピントがズレっぱなしの堀北お義兄さん……あ、間違えてしまいました。テヘペロ。

「はい。皆さんのリアクション通り、たとえば電子マネーとはいえ、高校1年生が気安く手出来る金額ではありません。実はこの半月ほど、私と綾小路君は各部活をめぐり、賭け試合を行っておりました」

実際には彼の独断場でしたが。まあ、そこらへんの一般人が天才に勝てるはずがありません。

囲碁将棋にオセロ、チェス、トランプ、ウノ、萌えゲー、空手、柔道、合気道、弓道、

野球、サッカー、テニスにバスケ、バレエ、バドミントン、卓球、囲碁将棋・・・あれ？1周まわって最初に戻ってしまいました。

とにかく、勝ちまくった結果が、手元に残るこの法外な額のプライベートポイントなのです。

「ふっ・・・早速、暗黒面に堕ちたか、坂柳」

「普通に犯罪だって分かってるよね？ふたりとも」

ふう・・・取り敢えず、まともな先輩方で助かりました。入学早々、賭博行為でポイントを荒稼ぎしようだなんて、どこぞのオリ主共や自称捻子ぽっちに・・・ケーホケホ！（二次小説の読みすぎ）

「もちろんです」

橘お義姉さん・・・じゃなくて、書記の言葉に答えてから、私は持論を展開しました。

「プライベートポイントなどと横文字で誤魔化してはいますが、その実態はご覧の通り、いくらでも水増し可能な、単なる子供騙しの電子決済システムです。だからこそ、わたしは学校改革案を作成致しました。綾小路君」

私の言葉を受けて、皆さんにプリントを配る清隆君。ふふふ．．．最高傑作を顎で使えりとは、なんとと言う贅沢なのでしょうか。

「なっ?!こ、これは．．．」

受け取った内容に驚愕するお兄さんでしたが、直ぐに眼鏡を押さえて笑い始めました。

「ふははっ．．．いいだろう。橘、臨時の生徒総会をセッティングしてくれ」

「え?!いきなりこの時期にですか?!」

「ああ、偽りの実力至上主義を打破するチャンスだ。坂柳有栖、お前の本気を見せてみる」

そして・・・生徒総会が始まりました。堀北会長以下、生徒会役員共の紹介が続き、ちよつとだけ本気を見せた綾小路君も、無難に挨拶を終えました。やはり、やれば出来るじゃありませんか。さあ、最後は私の出番です。

壇上に上がると、私は暫し居並ぶ生徒たちを眺めました。そのまま10秒、20秒、30秒・・・やがて、水を打ったように静まり返る体育館。完全に部活動説明会での会長を猿真似しただけですが、結構効きますね。

十分に場の雰囲気を作り上げると、私はゆっくり口を開きました。

「皆さん、はじめまして。この度、本校の生徒会副会長を拝命しました、元1年Dクラスの坂柳有栖と申します。ふふふっ・・・」

おわり